HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道農村における手作りカヌークラブの成立と地域社会
Author(s)	大沼，義彦；鈴木，文明；前田，和司
Citation	北海道大學教育學部紀要，75
Issue Date	1998-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29563
Type	departmental bulletin paper
File Information	75_P209-228.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道農村における手作りカヌークラブの成立と地域社会

大沼義彦[1)]・鈴木文明[2)]・前田和司[3)]

Formation of New-Sports (Handmade Canoe Club) and Rural Community in Hokkaido

Yohihiko OHNUMA, Fumiaki SUZUKI, and Kazushi MAEDA

1．はじめに

本研究の目的は，北海道農村における新たなスポーツのもつ可能性と地域社会との関連を捉えることである。ここでは，和寒町中和地区住民（中和小学校PTAの父親と教師）によって設立された「夢紀行21」という手作りカヌークラブの事例を取り上げるが，この実践に注目する理由は大きく二つある。一つにはカヌー一般ではなくて「手作り」カヌーの実践を行うという点，つまり，北海道の農村を舞台にした「新たな」[1)]スポーツ実践の形成という意味においてである。もちろん，「ニュースポーツの創造と展開」は北海道における地域スポーツの特徴[2)]に数えられるが，手作りカヌーの場合は極めて「地域性」や「場所性」[3)]にこだわる中で生まれてきた実践のスタイルという点で独自である。二つめには，こうした農村部におけるスポーツ集団の形成を，当該地域の「場」の論理をまといながら立ち現れてくる存在として捉え，「地域変動の構造的理解」や「『地域性』『共同性』の内実とスポーツ活動の内実」[4)]のもとに理解するためである。

第一の点に関連して，ここで手作りカヌーの状況[5)]について触れておきたい。この手作りカヌーの実践は，今日，和寒町，ひいては天塩川流域市町村のカヌークラブの設立を促し，北海道カナディアン・カヌー・クラブ（昭和63年4月設立，以下HCCCと略）というカヌークラブネットワークを組織するに至っている。「夢紀行21」の実践は天塩川流域市町村に広がりをみせた手作りカヌー実践の一つである。

手作りカヌーは，それ自体が新しいスポーツの実践スタイルということができる。もちろん，それは多くのカヌー愛好者が手にしている市販のカヌーとは違って，自らが製作するという楽しみを伴っている。しかし，手作りという点に立ち入って考えるならば，手作りカヌー自体の出自がより重要であったといわざるを得ない。それは，北海道や天塩川流域という「地域」へとこだわる中で選択されてきた実践のスタイルに他ならなかったからである。

いち早く手作りカヌーの普及を手がけ，HCCCの代表をつとめるS氏（和寒町在住）は元カヌー競技の国体選手であった。しかし，「北海道にはカヌーの愛好者も少ない。カヌーが北海道の生活文化とならなければ，北海道を代表する自分もありえない」ことに気づく。競技のスラローム・カヤックの普及にある限界を感じていたS氏は友人とアメリカに渡り，そこで手作りカナディアン・カヌーにであっている。S氏がそこで気づいたことは，地域あるいは川の姿でそれぞれカヌ

[1)] 北海道大学教育学部
[2)] 拓殖大学北海道短期大学
[3)] 北海道教育大学旭川校

ーの形状が違っていることであり，それを実現している手作りカヌーの存在であった。流域の上下，川幅，風向き等それぞれの地域にあったカヌーは，「地域」と地域固有の「場所性」に規定され，「生活文化」としての蓄積を体現する存在でもあった。S氏が「没場所」的な市販のカヌーから離れ，「北海道の生活文化」として手作りカヌーが選択された所以はここにある。

手作りカヌー自体に「地域性」が刻印されている。しかし，それが受容されたのは，はじめから「北海道の生活文化」を目指してのことではない。後述するが「夢紀行21」は小学校教員とPTAの活動の中から半ば「遊びの集団」として生まれたものであり，手作りカヌーというスポーツの「普及」を目指したものではない。ここで，第二の点と関連して注目されるのは，こうした組織が学校やPTAといった活動から生まれてきているという点である。もとより北海道農村部における学校やPTAの役割は，住民の学習，文化，スポーツ活動の面で極めて重要であった。「北海道では，行政制度が整備されていない新開地開拓の中で，まず地域住民自身が学校を建設し，学校と地域が密接に関わりながら発展して来たという歴史的特性を持つ。また，同時に学校がこの特性を積極面として活用し，意識的に学校を地域に開いてきた結果であ」り，「小規模校の教育の積極面を，地域全体で支える上で重要な母体となっているのはPTAである」。学校は地域における「文化的な協同活動のセンター」と規定される[6]。そして「生産における農事組合の単位に加えて，生活面における学校の役割を分析することが，北海道の農村地域社会形成論の重要な課題」[7]となっている。「夢紀行21」という手作りカヌークラブは，この地域における「文化的な協同活動」として誕生したと理解されてよい。ここでは，生産・生活をめぐる諸組織と学校をめぐる住民の活動という重層的関係の中に「夢紀行21」の実践を位置づけ，その活動の意義について検討してくもとのとする。

調査は，和寒町中和地区「夢紀行21」の正会員19名，関連する行政担当者，小学校教師を対象に面接により行われた。ただし，正会員19名中3名にについては，転出その他の理由により個人面接ができなかったため，ここでは残りの16名の事例を取り上げた。調査期間は平成8年2月から平成9年2月である。

2．調査地の概況

(1) 和寒町および中和地区の概要

和寒町の人口は，ピーク時の昭和31年，11,736人から年々減少し，平成2年には，5,682人(48.4%)となる典型的な過疎地域である。世帯数も，昭和45年の2,072戸から平成2年には1,794戸に減少している。

和寒町は稲作農村地域である。ここでは水稲を中心に麦類・豆類が盛んに作られている。ただ，基幹産業である第一次産業の割合は，昭和30年の78.7%から，平成2年の45.3%にまで減少している。

和寒町を対象とした調査に篭山京『戦後日本における貧困層の創出過程』[8]がある。篭山は，昭和29年～50年にかけて行われた継続的調査の中で以下のような和寒町の変化を指摘している。

和寒町は，「昭和29年時点で上川支庁管内で最も被保護世帯の多い町村で貧しい村の代表格」[9]であり，離村の問題が深刻な地であった。昭和29年に調査された133世帯中，昭和50年までに合計57世帯（43%）が離村に至っている（29年に1世帯，30-35年に17世帯，36-38年に9世帯，39-41年に8世帯，43年に8世帯，44-45年に5世帯，46-50年9世帯の離村)。「29年以降20年を，このさく北の村に生き抜いたものが57%しかなかった」[10]という。さらに篭山は，過疎化

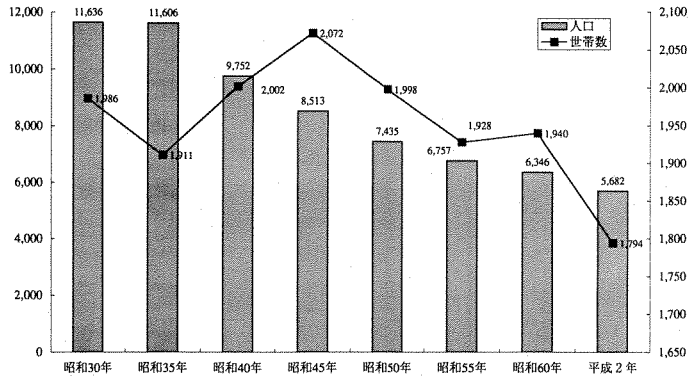

図１　和寒町人口一世帯数の推移

表１　和寒町における産業別就業者数の推移

	第１次産業	%	第２次産業	%	第３次産業	%	合　計	%
昭和30年	4,598	78.7%	375	6.4%	869	14.8%	5,842	100%
昭和35年	4,278	75.5%	342	6.0%	1,039	18.4%	5,659	100%
昭和40年	3,112	62.9%	636	12.8%	1,201	24.3%	4,949	100%
昭和45年	2,678	57.5%	717	15.4%	1,262	27.1%	4,657	100%
昭和50年	1,953	49.7%	858	21.8%	1,116	28.4%	3,927	100%
昭和55年	1,684	46.2%	794	21.8%	1,168	32.0%	3,646	100%
昭和60年	1,647	47.1%	730	20.9%	1,120	32.0%	3,497	100%
平成２年	1,405	45.3%	634	20.4%	1,065	34.3%	3,104	100%

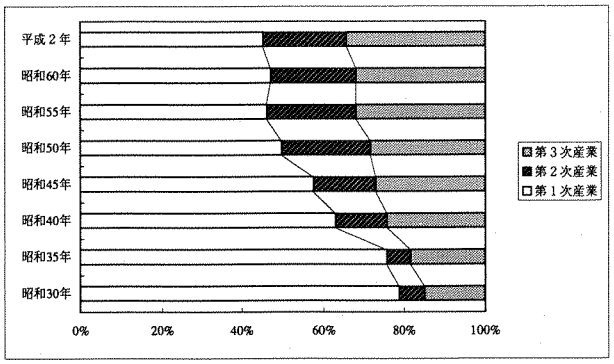

図２　和寒町における産業別就業者数の推移

の要因として，和寒町が自由入植地であったという歴史性や構造改善事業による規模拡大＝農家戸数の縮小という要因を指摘している。

中和地区は，町内でも最も早く移住入植し水稲栽培がなされた，中心的な稲作地帯である。また，農業構造改善事業が町の第一次事業としていち早く行われた地域でもある。中和地区では昭和41年9月，29戸をもって期成会が結成され，昭和42年に指定を受け着工，昭和44年には土地基盤整備事業が完成する。土地基盤整備事業により，87 ha，2,674枚の水田が275枚へと整備さ

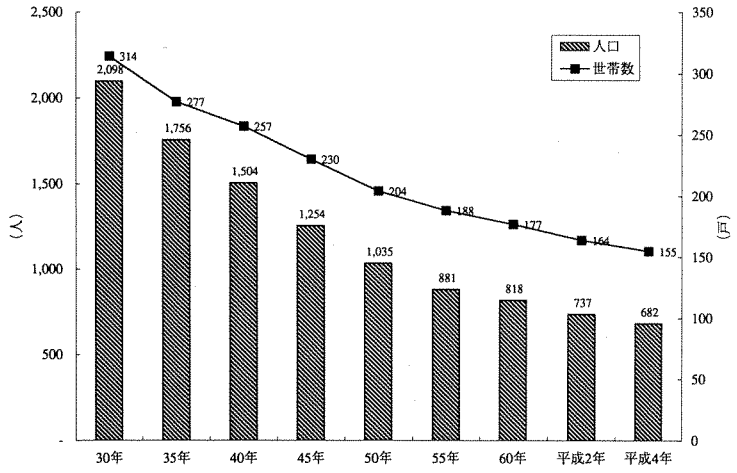

図3　中和校下人口一世帯数の推移

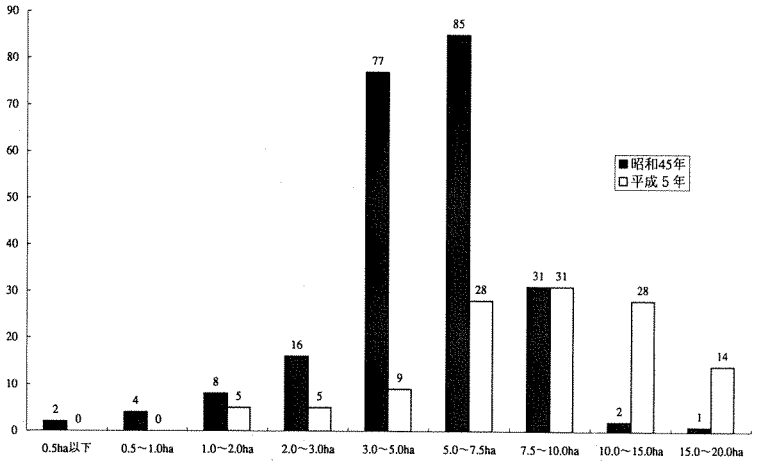

図4　中和校下経営規模別農家戸数の変化

れた。同年，経営近代化施設や大型トラクター3台，作業機13台の導入を契機に利用組合も結成され共同利用・共同作業体制が整えられている[11]。

人口は昭和30年の2,098人から平成4年の682人(32.5％)へと，また世帯数も314世帯から155世帯(49.3％)へと著しく減少してきている。その一方，経営面積別の農家数は，昭和45年で10 ha以上1.7％であったものが，平成5年には35.6％となり，各農家の経営規模が拡大してきている傾向がみられる。

高齢化の進展も著しく，平成5年度人口598人中，65才以上人口が147名(24.6％)とおよそ4人に1人が65才以上を占めている。ちなみに0～14才までは，106人(17.7％)，15～64才が345人(57.7％)となっている。

(2) 中和地区の範域および諸組織

このように中和地区は過疎化の進展が著しい地区であるが，そこで生活する住民の生活範域は，およそ三つに区別され存在している。それは，農事実行組合，行政区，そして小学校区である。ここでは住民の生活・生産をめぐる諸組織やスポーツの組織化の範域を確認するため，この点について若干触れておきたい。玉井によれば，「近年では，離農によって固執が減少した農事実行組合を再編統合する動きが出ているが，その際の再編集落の単位は，学校のある農村では，学校区の範囲に再編するところが非常に多い」[12] とされ，そして今日，「生活の新しい圏域の建設」としての学校の役割も注目されている。

① 農事実行組合

農事実行組合は北海道の農村にみられる集落組織である。田端によれば，それは「技術・経済・生活の三位一体的な農村の細胞組織」と規定される。農事実行組合は農事改良，経済活動といった目的のための機能集団であるが，同時に地縁集団として村落組織とも重なりあって農家相互の社会生活面とも深く関わり，歴史の浅い北海道の部落活動の重要な一面をも構成してきたとされる。その規模は，昭和5年平均で25戸で構成されるが，今日では10～20戸程度となり，日常的に最も結びつきの強い近隣集団，連絡班程度を範囲とするものに再編されてきているのが現状である[13]。

中和地区の農事実行組合は，三笠3，南丘1，南丘2・中和4，中和1，中和2，中和3，中和5，中和6，川西1，川西2の10の農事実行組合によって構成されている。その主な活動は前述のとおりである。スポーツについていえば，夏の農協ソフトボール大会がこの農事実行組合を単位として開催されている。

② 行政区

中和地区の場合，行政区と農事実行組合の地理的範域はほぼ一致している。しかし，農事実行組合が農業従事者の組織でもあるため，農業従事者以外の人々が関係してくるのは行政区となる。行政区は，農業従事者とそれ以外の人々によって構成される。和寒町町民運動会は地区対抗制で行われるが，その地区はこの行政区である。

農事実行組合と行政区は範域がほぼ一致するため，「区長」と呼ばれる人は原則的に2名おかれている。農事実行組合「長」は主に農事関係のとりまとめと農協との連絡機関の役割を果たし，行政「区長」は主に行政の連絡機関，生活とくに冠婚葬祭関係のとりしきりを行う。行政区長は地区内の「もちまわり」（＝輪番制）で決定されるが，過疎化により人口が少なくなってしまった地区では農事実行組合長と行政区長を兼ねるケースもみられる。

③ 小学校区（＝校下）とPTA

和寒町は各小学校区ごとの校下という「地域」に分けられる。中和小学校の場合は中和，川西(16線道路以南)，南丘，三笠3の地区を通学区域としている。中和小学校は，4学級（1-2年，3-4年，5年，6年）児童数35名で，管理職を含め教員が6名，他3名の準へき地指定校である（平成8年度）。PTAは原則的に全戸加入制をとっている（全110戸）。通学児童がいる世帯をPTA正会員（32戸），それ以外は準会員となる。

中和小学校は昭和45年度に体力づくり研究校に指定されるが，その際PTAを中心とする住民の協力で環境整備事業を行っている。この事業で体育施設＝カントリーコース（400 m，600 m）などの野外施設をはじめ，植物園等が作られた。「労働奉仕や古材提供を申し出て学校と一体となって」[14] 事業は進められた。近年でも小学校の修繕，石庭造成，陶芸窯（若草窯）の薪わりと小屋

作り等がPTAの父母（主に正会員）によって行われている。

各種PTA事業は，以前，行政区の区長が中心となって行われていた。しかし現在では，PTA正会員の父母が中心となっている。正会員が中心となってからはとくに父親の事業への参加率が高まった，というのが最近の傾向である。以前，運動会や学芸会などPTAの主要事業への父親の出席率は2～3割程であったが，正会員が中心となってからは7～8割の父親が出席するようになったという。

(3) 中和地区の社会教育・社会体育活動

社会教育・社会体育関係の団体は小学校区を基盤に組織されている。中和地区公民館は館長を小学校校長，事務局を教頭が務めている。

現在活動している主な団体・グループには婦人学級，敬老会，子ども会がある。婦人学級では，学芸会時のコーラス・合唱，陶芸・七宝焼，ミニバレー，リース作り（主に冬）が行われ，活動の場は小学校体育館及び小学校に作られた陶芸窯（若草窯）である。主たるメンバーはPTAの母親である場合が多く，小学校児童に味噌汁給食（年に1度）を提供してる。この活動は少なくとも「50年位」は続けられており，「伝統」となっているという。子ども会も主にPTAの母親が中心である。

体育・スポーツ関係では中和剣道愛好会がある。会の創設は高齢者の剣道のある「思い出話」から始まり，町の「素人剣道大会」出場がきっかけとなった（昭和50年）。愛好会では，当初，子ども（中和剣道少年団）の指導とメンバーの昇段が目標とされたが，現在ではメンバーの高齢化もあり少年団中心の活動となっている。中和地区の組織的スポーツ活動はこの剣道少年団だけであり，児童の約2/3がここに通っている。指導者，母親を中心に保護者会も結成され，地区には「小学校に入ったら剣道を」という雰囲気があるという。尚，中和小学校前には「和寒中和剣道発祥の碑」も建てられている。

これら以外に，中和地区には青年会，4Hクラブ等の青年組織があった。青年会では盆踊り，芸能発表会を主催していた。しかし，過疎化の進展，後継者不足等によりこれらの組織は解散し，現在活動はなされていない。

3.「夢紀行21」の設立

(1) 設立に果たした小学校教師（S教師）の役割

「夢紀行21」の設立は，中和小学校に勤務していたS教師の存在をぬきに語ることはできない。S教師がはじめて中和小学校，中和地区にカヌーをもたらした人物であり，地域的な活動についても深い関わりを持っていたからである。S教師が最初に手作りカヌーに出会うのは，中和小学校に着任する以前の社会教育主事時代である（そのとき講師をつとめていたのがHCCC代表となるS氏であった。そのためS教師自身，HCCC設立にも参画している。）。

S教師はまず，小学校の工作クラブでカヌーを作製した（昭和62年）。また，このカヌーを使って子ども会でのカヌー事業も行っている。この工作クラブや子ども会でのカヌーの実践は，やがて子どもを通じて親たちの耳にも届くようになる。

S教師には，子ども会等でこうした実践を行っていくなかで「地域の仲間」もできた。平成3年には，S教師が赴任してきた当時のPTA役員3名がS教師の指導で3艇のカヌーを作製している。その後，PTAの懇親会でカヌー作りに対する機運は高まり，「夢紀行21」結成へとつながっ

ていく。

ところで中和地区ではS教師の実践を契機とし，「夢紀行21」が結成されていくことになるが，ここでS教師と地域との関係について触れておきたい。そこには農村の小規模校に見られる学校・教師と地域の人々の人間関係がある。

S教師はカヌー以外にも積極的に地域活動を行っている。それは教師生活に入り，父母と交流する過程で得られたS教師の地域へのスタンスでもある。父母を前にしたS教師にとって，学校だけでなく農林業をはじめとする地域の問題は無視しえない存在であった。S教師は「農業や林業の知識を吸収するとともに自分でも農業のあり方や矛盾点を学習しましたし，実践するようになった」と述べている。実際，S教師は中和小学校に着任してから，過疎化＝若い担い手の減少がひびき地域（＝青年会）で運営できなくなっていた盆踊りを子ども会の事業として復活させている。また，学校内に陶芸窯（若草窯）を設置したり，地区内の有志を募って在日外国人の短期受け入れ等も行っている。地区の産直集団（そのまんまの会）との活動では，旭川に出店する際の企画自ら提供し(野菜を売るとき，カヌーに水を入れ，その中でトマトすくいを行う等)，会の知恵袋的役割も果たしている。

地域の側も学校・教師に対しては協力を惜しまなかった。先に見たように中和小学校では環境整備をPTAの手で行っている。それだけでなくPTAの父母は「転任していく教員の引っ越しの手伝い」を熱心に行い，たびたび「転任先まで荷物を運んで行って，行った先の土地でよく驚かれ」たこともあるという。

(2)　「夢紀行21」の設立とその活動

「夢紀行21」設立は，S教師がPTAの有志と共に平成4年の11月から翌年2月にかけてカヌーを作製したことに始まる。同年は大凶作の年でもあった。

平成4年の夏，PTAの環境整備時にカヌーを作ってみるかという話が持ち上がった。それは，当時S教師自身，着任後7年が経過し，いつ異動になってもおかしくない時期であった。子どもの担任等で，S教師と日頃からつきあいのあった親達にとって，カヌー作りは，S教師の「おきみやげ」でもある。そして「1軒に1台あってもいいじゃないか」という具合に地域でのカヌー作りとクラブの結成に着手していく。

早速，学芸会時に募集の張り紙を出し，作製メンバーを募った。そして，PTA役員以外の親達(正会員)にも学芸会後の飲み会で誘う，ないしは事後承諾をとりつけるなど，半ば強制的にではあったにせよメンバーが集められた。募集の過程では，出稼ぎに行く人への配慮(「冬の出稼ぎに行っている間に俺達が作っておくから」) も行われている。こうして集まったメンバーは21名であり，この21名に「子ども達の21世紀の夢」という意味をかけて，S教師は「夢紀行21」という名前をつけている。「夢紀行21」の正式発足はメンバーのカヌーが完成する平成5年4月である。

「夢紀行21」はPTAの正会員，役員経験者をもとに結成されるが，その要因をS教師は以下のように理解している。第一は，カヌーに関する情報・話題が町や中和地区にみられるようになったことである。実際S教師は，川や海（サロマ湖）に子どもを連れていったり，メディアの取材に受け持ちの子どもを連れていったりしている。また，学校でカヌー作りをしたことなどが，子どもの口から親の耳に入っている。第二は，カヌー指導者としてのS教師の存在である。カヌーを作る際の材料の調達，道具の手配はS教師でなければできなかった。さらに作って乗るための指導者として，カヌーのアフターケアも含めてできる人物となるとS教師以外にいなかった。カ

ヌーを製作し乗ることは，S教師が異動してしまった後ではとうていできないことである。第三は，前年3艇のカヌーがS教師の指導で実際にPTAの父親が作製していたことである。そして最後に地域の人々の思いがある。S教師はそれを「子どもの小さいうち（自由の利く，親について歩く時期）一緒にカヌーに乗りたいという親の気持ちと，農業，あるいはそれに類した活動ばかりでなく，生活に変化をもとめたため。また，飲んだ勢いで言葉が逃げ道をなくしたため。」と述べている。

ともあれ，カヌーの製作は，3班（第1陣～第3陣）に分けて行われ，合計23艇のカヌーが完成した。製作費は1艇約7～8万円である。作業場は中和地区の共同農機具格納倉庫であった。中和地区は110戸とされることから，この時作られた23艇という数は，5軒に1艇以上の割合になる。

期間中「カヌー一艇分は酒を飲んでいる」というほどに，カヌーの製作を通じたメンバーの親密な交流がはかられた。メンバーのほとんどが農家（男性）あり，農業を通じた「顔見知り」ではあったが，同じ農事実行組合でもなければ頻繁に話をするわけでもなく，中和校下という広い範囲では単に「顔を知っていた」にすぎない。PTAの環境整備にしても年に数度のことである。

クラブとしての行事は4月の総会，6月南丘貯水地で初漕ぎ（田植え後），夏の川下り（2回），和寒町手作りカヌー講習会の指導などである。クラブ行事についてはメンバーである父親だけでなく，子ども，母親を含め家族単位で参加している。現在「夢紀行21」は，19名の正規会員，4名の特別会員，3名の賛助会員により構成されている（平成8年度）。

4．「夢紀行21」に集まった人々

(1) 「夢紀行21」メンバーの生産・生活

「夢紀行21」のメンバーの年齢は33才から54才まで，平均40.8才である（全14名）。30～34才までが1名，35～39才までが6名，40～44才までが3名，45才～49才までが3名，50～54才が1名となっている。小学校のPTAを母体としているだけに，30才代後半から40才代までの人々が中心である。家族人員数は教員であるEさんを除いた18名で平均7.2名となっており，家族人員9名が4世帯，8名が6世帯，7名が3世帯，6名が2世帯，5名が1世帯，4名が2世帯である（全18世帯）。また，16世帯中，3世代家族が9世帯，4世代家族が5世帯で，核家族世帯はわずか2世帯であった。

平成8年度の経営耕地面積は，離農したGさんを除く15名で平均12.1haで5 ha以上10 ha未満が4，10 ha以上15 ha未満が7，15 ha以上が4である。平成5年度中和校下の平均経営耕地面積が9.06 haであることから，メンバーの階層は中農以上であることが推察される。作付け品目は水稲が中心で，麦・豆・かぼちゃが生産されている。その他に越冬キャベツとして有名な，キャベツも生産されている（昭和45年，「和寒そ菜組合」設立）。しかし近年ではメロン，アスパラ，カリフラワー等の野菜やハウスでの切り花栽培も多くなり，そのため「むしろ冬場の方が忙しい」状況もみられるようになったという。労働力については機械化の進展もあり，播種期・収穫期を除けば世帯主夫婦とその親の2～4人でまかなうことができるとされる。

生産関係の組織では農協の理事を務める者が2名，農協青年部部長経験者も含まれている。また，30才代のメンバーは全町組織である農業青年会議でも中心的存在となっている。さらにこれらのメンバーは農協や行政の「公的」組織だけでなく，自主的なグループを地域や職域を越えて組織し活動を行っている。「あぜみちクラブ」[15]やウェイン（農業簿記のパソコンクラブ），特栽米

そのまんまの会，地湧の里など有機栽培や産直グループが組織され，その中で「夢紀行21」の若いメンバー達は中心的な役割を担っている。その一方で，地域の年齢階梯集団でもあった青年会はNさん（42才）の年代を最後に活動を停止し，中和地区内の青年組織はその後結成されてはいない。

生産関係組織へのメンバーの関わりについては，以前の農協＝農事実行組合など地域を単位とするものから，個人的なネットワークによる組織，異業種交流や産直など地域を超えた組織へと多様な関わりをみせてきている。

表2　「夢紀行21」メンバーの生産・生活

世帯番号	実行組合	平成5年度経営耕地面積(　)内は畑地	平成8年度経営耕地面積（聞取）	経営品目	専業兼別	出稼	家族人員	家族形態（　）は年齢 下線が「夢紀行21」メンバー	代	組織・役職等（生産・生活）	青年会	農協青年部	その他（農業の展望等）
1	南丘2	12.49 (1.81)			1兼		8						
2	南丘1	14.80 (3.76)	15.25 (5.45)	水稲，秋小麦，かぼちゃ，小豆，越冬キャベツ，デントコーン，えん麦	専業		5	①世帯主(54)②妻(50)③長女(28)他出？④長男(23)⑤次男(14)⑥母(78)	4	農協理事，改良区理事，第3消防団員，剣道会員，スポーツ少年団指導	25才位まで	20年位前まで	これからは水稲を拡大していきたい。土地と米の値段の割合が不安
3	南丘2	10.41 (1.96)	10.30 (2.30)	水稲，かぼちゃ，キャベツ	1兼	パイト	6	①世帯主(47)②妻(42)③長女(16)④(13)⑤　(10)⑥母(80)	3	南丘区長		40才位まで	減農薬，有機農業にとりくんでいる。
4	中和5	8.75 (0.20)	8.30 (0.30)	水稲，かぼちゃ，キャベツ，トルコ桔梗，ユリ	1兼		8	①世帯主(-)②妻(-)③長男(12)④次男(10)⑤三男(5)⑥父(-)	3		入っていた	28-9才から	
5	中和3												
6	中和4	15.42 (5.14)			1兼		8						
7	川西2	7.73 (0.59)	−	−	1兼		4	①世帯主(46)一死亡②妻(45)③長女(11)④長男(9)					
8	川西1	6.14 (1.15)	7.50 (2.00)	水稲，他	1兼	○	9	①世帯主(-)②妻(-)③長女(-)④長男(-)⑤次男(-)⑥三男(-)⑦父(-)⑧母(-)⑨祖母(-)	4	あぜ道クラブ（無線一農業の勉強会）			
9	川西2	16.76 (6.06)	13.10 (2.40)	水稲，小豆，小麦，かぼちゃ	1兼		8	①世帯主(47)②妻(39)③長男(17)④長女(14)⑤次女(13)⑥母(77)	4			○	有機農業・産直（個人）
10	川西1	6.30 (0.24)	8.91 (2.91)	水稲，大豆，麦，キャベツ，カリフラワー	専業	パイト	4	①世帯主(36)②妻(36)③長男(12)④次男(10)	5				
11	三笠3	7.94 (2.63)	11.65 (4.85)	水稲，かぼちゃ，小豆，キャベツ	1兼	暇な時	8	①世帯主(33)②妻(-)③長男(19)④次男(17)⑤三男(14)⑥父(-)⑦母(-)	4	機械組合組合長，地域センター運営委員，農業青年会議		○	今まで3度拡大。今年も山，畑を借りた（農業法人経営）。
12	三笠3	9.04 (1.60)	17.00 (11.0)	水稲，かぼちゃ，大豆，キャベツ，ビート	専業		9	①世帯主(56)②妻(56)③本人(35)④本人妻(34)⑤長女(13)⑥次女(11)⑦三女(9)⑧長男(5)⑨四女(2)	5	農業青年会議，ウェイン（バソコンクラブ），あぜみちクラブ（無線），バンド		理事	20才から営農。自主検定資格取得。
13	三笠3	5.00 (0.33)	5.00 (0.33)	水稲，緑肥（本人父親が農業）	1兼		8	①世帯主(76)②妻(74)③本人(37)④本人妻(36)⑤長女(13)⑥次女(11)⑦長男(9)⑧祖父(86)	3		三笠親和会		本人は会社常務取締役。農産物の業務販売
14	中和4	14.11 (6.66)	17.00 (7.00)	水稲，かぼちゃ，小豆，緑肥	1兼		7	①世帯主(42)②妻(39)③長男(15)④長女(14)⑤次男(11)⑥父(71)⑦母(69)	4	農協理事	入っていた		
15	中和6	9.31 (1.38)	10.00 (3.10)	水稲，じゃがいも，スイートコーン，アスパラ，メロン，小豆，かぼちゃ，キャベツ，緑肥	1兼	○横浜	8	①世帯主(42)②妻(36)③長女(13)④長男(11)⑤次男(9)⑥三男(7)⑦父(75)⑧母(70)	4				最近3.4年がきつい。面積を増やしたことで，土地，機械や建物の負担が大きい。
16	中和5	14.60 (5.35)	14.20 (6.20)	水稲，かぼちゃ，ビート，秋小麦，トウモロコシ，メロン，トルコ桔梗	1兼	○運送業	9	①世帯主(59)②妻(38)③長男(13)④次男(11)⑤長女(4)⑥父(64)⑦母(64)⑧祖父(88)⑨祖母(84)	4	農業振興対策協議会，農畜産物対策協議会，地域産業開発委員，青年会議代表		前部長	地湧の里（産直グループ）
17	中和6	12.29 (2.65)	14.80 (4.80)	水稲，かぼちゃ，小麦，キャベツ，緑肥，コーン	1兼		7	①世帯主(37)②妻(36)③長女(12)④次女(10)⑤長男(6)⑥父(64)⑦母(62)⑧祖父(97)	4	あぜみちクラブ，ウェイン，農業青年会議，気球クラブ，消防団，行政区長		○	
18	中和6	7.35 (1.32)	10.40 (4.40)	水稲，小麦，イモ，小豆，かぼちゃ，コーン，キャベツ，カリフラワー，アスパラ，ミニトマト，花	1兼		7	①世帯主(36)②妻(36)③長女(13)④長男(11)⑤父(63)⑥母(61)⑦祖母(86)	3	ウエイン副会長，農業青年会議，特産米そのまんまの会，あぜ道クラブ		現部長	昭和50年前に大きく増やし，3年前にも増やした。
19	中和1	10.60 (4.60)	18.00 (12.50)	水稲，麦，ビート，イモ，かぼちゃ，小豆，大豆	1兼	△	6	①世帯主(40)②妻(37)③長男(8)④長女(5)⑤父(67)⑥母(67)	2	農業青年会議，和来熱気球クラブ		○	

(2)　「夢紀行21」メンバーと学校・PTA

北海道農村おける学校は，子どもの教育の場だけでなく，地域住民にとっての「文化的な協同活動のセンター」でもあった。中和地区では盆踊り等を企画運営していた青年会活動も途絶えてしまっている。生産関係の協同関係が地域や職域を超えていく中にあって，学校は文化・スポーツ活動を契機として地域生活の中に協同の場を用意するものとなっている。「夢紀行21」のカヌー作りには，こうした協同の場に加えて，S教師の影響が大きかったにせよ教師－父母の関係を「同じ地域の人」とするような関係へ変える雰囲気があったと考えられる。

通常，PTA活動として「夢紀行21」メンバーが関わってきたものに，環境整備（小学校の修繕，石庭造成，若草窯の薪わりと小屋作り等。「力仕事が多い」のでこれは父親があたる），味噌汁給食（主に母親，婦人学級），運動会・学芸会（PTAだけでなく婦人学級，敬老会，保育所も参加）の手伝いがあった。こうした活動の節目ごとに教職員を交えた「反省会」が催される。教職員とPTAの父母はこうした「反省会」を通じて交流することになるが，どうしても教師と父母という立場がでてしまう場合が少なくない。教員にはプライベートな事情や，あまり地域と関わりたく

ないという意識（とくに若い教師）もあるという。一方，PTA側にも「来年，子どもの担任になるかもしれない」「先生に変なことはいえない」といった意識が働く。「反省会」というインフォーマルな場であるにせよ学校・教師と父母という関係がここにある。

しかし，S教師の場合は違ったという。教師と父母という関係ではなく，もっと近い存在であったとメンバーは述べている。互いに地域の仲間といった存在で，気兼ねなくいろんな相談ができる人であった。S教師を交えた「夢紀行21」のカヌー作りでは「カヌー一艇分は酒を飲んでいる」というほどに，メンバーの親密な交流がはかられたのである。すでにS教師は学校・教師という関係の外にあり，「夢紀行21」は教師と父母のノンフォーマルな場となっていた。こうした場は，他の教師だけでなく父母の側にも影響を与えている。「夢紀行21」でカヌーづくりを始めると，様子を見にきたり，さしいれを持ってくる教師もあらわれ，いつの間にか気軽に話せる存在になっていった。「夢紀行21」でカヌーを作るようになってからは，「中和小学校に着任した先生はカヌーを作らなければならない」というような雰囲気にもなっていったという[16]。「新任の先生にもすんなりはいいていくことができた」，「環境整備でしか顔を合わせなかったが，カヌーなら好きなことがいえる」，「夢紀行で何かやるときは先生が来てくれる」，「初漕ぎにはたくさん集まった。学校の研修旅行にはあんなに集まらない」というように，これまでの地域－学校関係と違った関係が教職員とメンバーの間に生まれていったものと考えられる。

もとより，「学校の行事には親が欠かせない」。学校にとっても，行事を維持していく上で，親の協力は欠かせなくなっている。とくに過疎化が厳しい小規模校の場合はそうである。ただ，こうした行事だけでは学校と父母，父母同士の親密な交流をはかることには限界があるのかもしれない。例えばKさんは次のように述べる。「中和地区110戸でも役員なんかやっていてもしゃべる機会はない。大きな地域でサークルとかあればいい意味で顔を知ることができる。顔を知ることが大事。役員でもしゃべらない人がいたり，上の人とは話すけど，下の人とは話さない。以前はしゃべらなかったが夢紀行21で話すようになった。」PTAの父親を中心に結成された「夢紀行21」は，カヌー作りというある継続的な活動を通じてPTAとは異なった対面交渉を促す存在であった。

5．「夢紀行21」がもたらしたもの

(1) 「夢紀行21」参加の動機とメンバーのカヌーに対する認識

「夢紀行21」は学校やS教師との人間関係の中から，PTAの父親を中心に結成される。しかし，彼ら自身もともとカヌーに関心があったわけではなかった。加入のきっかけについては，日頃からのS教師自身やS教師との付き合いがあった人に誘われた，事後承諾，募集の張り紙をみてというものがほとんどである。また「うちにはカヌーがない」と子どもにいわれたことが直接のきっかけとなっているメンバーもいる。また，出稼ぎでカヌー作製に加われない人も，他のメンバーがカヌーを作るから，ということでメンバーに加えている。

メンバーのカヌー作りそのものに対する動機はあまり強くない。町内でのHCCCの活動は知っていても，「自分がカヌーをやるとは夢にも思っていなかった」のである。どちらかというと，S教師のために「みんなでやろう」という意識や「みんなと集まりがもてるから」という意識の方が強い。ただ，「子どものため」という動機はそれぞれのメンバーに少なからずみられた事項である。誘いを一度は断っても「子どもが乗りたいというので作らなければと思った」メンバーもいるためである。「夢紀行21」は「単なる遊びのグループ」であり，「カヌーは（子どもと一緒に遊べる）便利なおもちゃ」であった。もちろんカヌーが「スポーツ」とは考えられてはいない。

カヌーに対する率直な認識は，「町の暇な人がやるもの」であった。ブルデューが「名称の単一性（テニス，スキー，サッカー）が，スポーツ実践のやり方の拡散を覆い隠してしまう」[17]と述べるように，カヌーという名辞自体に二重性がある。都市住民のレクリエーションとしての市販されているカヌー，および実践のされ方（アウトドアルックに身を包みRV車で乗り付ける等）と，冒頭に述べた手作りカヌーの出自は位相をことにしている。同じカヌーでありながら一方は都市住民のアウトドア志向や差異を満足させるモノとしてあるが，一方は「北海道の生活文化」を目指しての手作りカヌーである。しかし注意しなければならないのは，「名称の単一性」があるが故に農村にすむ人々も都市住民と同じカヌーを手にし，楽しむことができるという点である。しかも，手作りとなればわざわざ買う必要もなく，地域の川の形状に合わせたオリジナルカヌーも作製可能である。カヌーを手にするということは，この「名称の単一性」のもとで都市と農村という地理的心理的「距離」を解消せしめることにもつながっていく。

しかしそうではあっても，カヌーはあくまで「子どもと一緒に遊べる便利なおもちゃ」であり，「町の暇な人がやるもの」であった。実際，「夢紀行21」メンバーがカヌーに積極的に関わるのはカヌーを製作するという過程を経なければならなかった。

表3　「夢紀行21」加入の動機

世帯番号	メンバー	主要メンバー	夢紀行21役職	カヌー教室	釣遊愛好会	これまでのスポーツ	加入の動機・きっかけ	事業への参加と結成後の変化
1	Aさん	○	会　長	○?				
2	Bさん				指導者		俺だって「よしやるべ」という感じ。一番下の子が5年生の時で，S先生にも3年間習っていた。S先生とは付き合いがあって，一緒に飲んだりはしていた。HCCCの活動は知っていた。でも自分がそれに乗るとは思っていなかった。仲間ののりがとにかくいい。	家族でカヌーの話をするようになったが，特に変化なし。若い人と話すことも多くて面白かった。子どもが中学へ行ってあまり行かなくなった。
3	Cさん	○		○			自分は小さい頃いい思いをしたことがないので，子どもに何か違べるものを残そうと思った。先生があと1年で異動ということもあって，単純なきっかけで始めた。HCCCの活動は知っていたが，自分がカヌーをやるとは夢にも思っていなかった。	仲間が増えた。本州から来る人にも指導したりして，HCCCの人達とも関わるようになった。カヌーの前から地域での交流は盛んだった。でもカヌーに乗ってまた違う。
4	Dさん		前会計		○		（話に）のってみようと思ったきっかけは，みんなと集まりがもてると思ったから。子どものことは作り始めてから。農業関係の集まりは肩書などの心構えがいる。カヌーは学校と子どもが中心。	最低3回は乗る。子どもはカヌーがあるから連れて行きやすい。出かける回数が増えた。夢紀行は単なる連絡のグループ。
5	Eさん	教師	前監事					
6	Fさん	○	元会長	○?	○			
7	Gさん	○	前会長	○	○		Fさんがカヌーに興味をもっていてなんとなく「カヌーつくるべや」というようになった。学習会時に冷遇者を募ったときFさんに名前を書かれてしまい，事後承諾。	カヌーは「町の暇な人がやるもんだろう」と思っていた。実際作ると「いいもんだ」。カヌーをスポーツとは考えていない。
8	Hさん		前監事	○	○	野球・ソフト	琥珀整備の時にS先生に勧われた。その時は出費ぎに出ていて，Fさんが作ろうかといってくれたので作ってもらった。	子どもが楽しみにしている。三和小と合同研修を行うようになった。地域の変化はない。
9	Iさん	○	事務局				PTAの役員をやっていてS先生に乗せられた	子ども達がいちばん影響をうけた。
10	Jさん				○	卓球・バド	<後発>初め勧われたとき1度断った。下の子が1年生の時，S先生の影響を受け，カヌー製作に至った。	子ども達と一緒に遊びに出かける気持ちの余裕ができた。これはS先生が教えてくれた。
11	Kさん	○				スキー1級，朝野球，ミニバレー	当時PTA会長をしていて琥珀整備の飲み会の時にそういう話になったが，S先生がわざと見えるように書いていたカヌーをみて，1度は作りたいなと思っていた。	土手からと，川からの視線が違って面白い。カヌーに乗っている自負みたなものがある。
12	Lさん						まわりでやる人が増えた。Fさんに勧われた。みんなやるならやってみようと言うことで始めた。一人だけ作らんという訳にはいかない。学校関係や農業関係もあったので。	今は全然参加していない。1年に1回浮かべればいい方。役員でもないので。総会には参加している。
13	Mさん					野球・ソフト	父親参観日でPTAの役員から勧われた。勤め人でもあり，農家のようには参加できないが，夜ならば可能かもしれないと思い参加した。「おつき合い」だからというのもあったが，「カヌーをもっていても不都合ではない」，「子ども も喜ぶかな」という気持ちであった。	なかなか参加できない。学校との関わりが遠くなった気がする。以前は学校の教師とも親しくはなかった。地域の人達とも同窓でもないこともあり，あまり親しくはなかった。
14	Nさん	○				ミニバレー	赴任して7.8年たつS先生がいつ出るか，いつ出るかと話をしていた。いつ出ていってもいいようにS先生の「おさみやげ」のつもりでカヌーを作るかという話がでた。1軒に1台あってもいいじゃないかという話になった。	30才後半から，40才代の人が多く，地区でも中心的な人達が集まった，会社の野球チームのようなまとまりがある。
15	Oさん				○		<後発>子どもが乗りたいというので作らなければと思った。子どものため。Gさんにほとんど作ってもらった。学習会の時に話がでていたが，冬出費ぎにでるので，どうもといっていた。	初めは子ども も喜んでいた。カヌーをもっていれば普段行き来しないひととも会える。カヌーにはあまり乗れていない。
16	Pさん				○	スキー指導員	PTAの役員さん達が2.3年前に決めた組織。みんな作るんだったらということで加入。	年1回ぐらいしか行っていない。カヌーに乗ったときは川セミや水島がみれてすばらしかった。
17	Qさん					釣り	学習会の張り紙をみて。とくにカヌーに興味があったわけではないが，何人かでやろうということになって始めた。	行事にはだいたい出ている。学校との関わり方は以前と変わらない。
18	Rさん				○	スキー1級	<後発>みんなが作った次の年の夏に勧われて面白そうだと思い作ることにした。子どもにも「うちにはカヌーがない」と言われたこともきっかけだった。	濁水式ぐらい。川下りには行っていない。
19	Sさん				○	スノーボール，気球	S先生とは「そのまんまの会」で付き合いがあった。先生に勧われた。子どもが小さくPTAでもなかったが，「どうせなるんだから」ということで加入した。	飲み会，濁水式には行く。ただ町のイベントにひっかかってなかなか乗れない。

(2)　カヌーの楽しみ

この手作りカヌーには二つの楽しみがある。作る楽しみと乗る楽しみである。

メンバーの多くが作る楽しみを語っている。指導にあたったのはS教師と第1陣で作製した人々であった。全て手作りであることから，型が一緒でも違ったものができたり，工夫しだいで様々なカヌーを製作することが可能であった。中には農作業を通じて，大工仕事に心得のあるメンバーもいたし，「道具は，農作業でも使うから何でも使えた」。「誰かが一人工夫したら，自分も他の

工夫をした。その時は工夫の競争だった」という。この過程を通じてカヌー作りに没頭する人もでてきた(Aさん，Gさん，Cさん，Fさん)。また，メンバーは協同して作るという楽しみも述べている。それは晩酌を兼ねたカヌー作りでもある。前述したように，学校の教師も度々さしいれに訪れては席を共にしている。人間関係も和気あいあいとして，行って話をすること自体が面白かったと語るメンバーも多い。ここでは「学校のこと，地域のこと」に加え「農業」に関する話題が中心を占めたという。

各メンバーすべてが「夢紀行21」の事業に毎回参加しているという訳ではない。カヌーは作ってしまえばそれに乗る事業が中心となる。しかし，実際に乗るという段階になると毎年全員が参加できているわけではない。メンバーの仕事の事情もあるが，乗る方の指導者としてS教師が「夢紀行21」結成後，転出してしまったことも影響している。

ともあれ，メンバーの多くが川下りに参加する中で，日頃目にする風景の違いや，水鳥の姿に

資料1　カヌーの製作の楽しみ

・（小学校の先生も作っていて）小学校の先生に難しいところはやってあげたり，もちつもたれつだった。作るのが面白い。自分は凝り性だからいろいろ凝ってみた。夜中の2時3時まで作っていた。毎日楽しみで通っていた。　＜Cさん＞

・魅力は作ることが楽しい。形がうまくできなかったから。みんな同じ型なのに，形がバラバラになった。人間関係は和気あいあいとしていて行くのが面白かった。自分のものではなくても見ていた。道具は農作業でも使うから，何でも使えた。誰かが一人工夫したら，自分も他を工夫した。その時は工夫の競争だった。＜Dさん＞

・カヌー作り自体に魅力はない。手作りカヌー教室で教えていることに楽しみがある。＜Hさん＞

・板をはる作業が楽しかったし，その後の飲み会が楽しかった。GさんとFさんがとくにはまって，Gさんはたばこはやらなかったが，カヌーのところで酒を飲むことを覚えた。＜Iさん＞

・作るのは面白い。仲間の雰囲気とか。さしいれで飲み会，晩酌をした。＜Kさん＞

・夕方，晩酌をかねて作った。＜Lさん＞

・初めの頃2～3回作りに行った。それも5・6枚ののストリップ材をはった程度で，あとは飲みながら話をしていた。学校のこと，地域のことが話題の中心を占めていた。農業が話題となったときはもっぱら聞き役。だから自分のカヌーは材料費を払って，他のメンバーに作ってもらった。しかし，昨年自宅の納屋でE先生の助けを受けて2艇作成した。＜Mさん＞

・カヌーは突然きたような話。Gさんの影響力が大きい。進水式に間に合わせようとつくった。何とか作り上げなくてはと思った。＜Oさん＞

・作業には行っただけで話だけして終わることもあった。指導はS先生と第1回目に作った人達が毎日来てくれていた。＜Qさん＞

新たな感動を覚えたことを語っている。「自分がカヌーをするとは思っていなかった」,「カヌーは都会の暇な人がやるもの」と考えていたメンバーも，実際カヌーに乗ることで自分が住んでいる地域の「よさ」を再認識したという。

(3) メンバーと家族

カヌーを所有し，川下り等の事業に参加する様になると，子ども・家庭でカヌーが話題となったり，子どもと一緒に出かけることで気持ちに余裕が生まれたりと生活の変化を感じているメンバーもいる。

例えば，Jさんの場合は「子どもと一緒に」という気持ちがカヌーによってもてるようになり，一週間「男だけの旅」と称し自転車やカヌーで遊びに出かけてしまったという。「カヌーをはじめる前からは考えられない」と語っている。

また，Gさん（前会長，平成8年急逝）の妻はカヌーをやるようになった夫の変化を次のように語っている。

カヌーを始める以前のGさんは，農業以外にこれといった趣味をもっていなかった。カヌー作りのきっかけは「事後承諾」で仲間に入れられたことである。Gさんは，農業については亡くなる前年，実行組合内で作況1位となっている。唯一の楽しみは，パチンコぐらいのものであったという。ところがカヌーに誘われて以来，カヌー作りに没頭するようになる。Gさんは，もともと大工仕事が好だったこともあり，創意工夫を重ねながら短期間に4艇も作製した。できばえも良かったことから，「夢紀行21」の中では製作指導を任されるほどであった。そのことからGさんは，町のカヌー教室にも指導者として呼ばれている。町のカヌー教室では参加した道内外の人々の信頼を集め，親しくなり，家族連れでキャンプを行うなど新たな交流も広がった。これら家族とはその後，頻繁に連絡取り合い，手紙や年賀状も交わしている。Gさんはカヌーをはじめてから仕事の段取りをつけるようになり，カヌーにあわせ仕事の計画を立てるほどであったという。カヌーがあると1回でも子どもと接する期間，時間ができ，そのことがGさんにとっての喜びであった。一般に祖父母と同居している農家の父親は，忙しさに流され子どもと関わらなくともすむとされる。しかし，祖父母と同居していなかったGさんとって，子どもと過ごす時間は貴重なものであった。またカヌーでは，買い物に出かけるのと違い，身体を使って漕ぐことから，子ども，家族，地域の人々と体験を共有することができた。そして，そのことが地域の共通の話題にもなっていった。

Gさんの事例からは家族だけでなく，カヌーによる生活の変化も認められる。生産面においては，すでに一定の実績を有するGさんであったが，その人間関係は生産面を中心としたつきあいがほとんどであったという。Gさんは町主催の「カヌー教室」等を通じ，道内外の人との交流を深める中で，生産面をめぐる人間関係だけでなくカヌーを通じた広い人間関係を築いていったのである。

6．中和地区の中の「夢紀行21」

「夢紀行21」は，小学校教師とPTAの父親を母体として形成されたクラブであった。こうしたスポーツ集団の組織化の背後には地域社会の生産・生活をめぐる変化が存在している。「夢紀行21」もその中の一つといえる。よってここでは中和地区内での「夢紀行21」設立の意義について考えなければなるまい。

かつて「技術・経済・生活の三位一体的な農村の細胞組織」として機能していた農事実行組合や行政区は，過疎化・高齢化とともに，その規模を大きく縮小させ，現在では生活面での相互扶助を行うことも困難となってきている。例えば，すでに中和4実行組合には農家が2戸しかなく，生活上の相互扶助機能（例えば冠婚葬祭）は単独では果たせなくなっている。また，高齢化や後継者不足も深刻である。農事実行組合や行政区の「寄り合い」があっても，これから漏れてしまっている高齢者世帯が多いという。むしろ，後継者のいないお年寄りが出ていく機会が少なく，行きづらい雰囲気を指摘するメンバーもいた。個別に考えれば，農家の経営自体は規模拡大の方向で安定しても，生活面での相互扶助機能の喪失は，個別農家の存続自体をも不可能なものにしていく。「地域のまとまり」を重視しながらも，地域社会では実際に階層分解が進行し，過疎化に歯止めがかからないという現実がある。そこに，規模拡大とともに経営の個別化・孤立化が進展してきている現在の地域社会－農家のありようをみることも可能である。

とくに中和地区はいち早く農業構造改善事業（昭和42-44年）が開始され，その後多くの農家が離農してきた地域である（「第一次離農期が昭和49年頃で，5－6年前に第二次離農期があった」）。「夢紀行21」のメンバーはこうした波をくぐり抜け，生き延びてきた人々であり，離農跡地を購入し，規模を拡大することで何とかつないできた人々である。しかし今日では，土地の下落，土地があっても条件がよくない（好条件の土地が残っていない）ため，規模拡大のリスクも大きい。「拡大による生き残り」をはかることも困難な状況がある。さらに生産者価格の下落，農作物自由化も追い打ちをかけている。「あと5－6年したら，第三次（離農期）がくるかも知れない」とするメンバーもいる。

このような状況の下，若い世代は様々なサークル活動を通じ，産直や有機栽培など多様な試みを展開している。そこに新たな展望を切り開こうとしている。Oさんはこうした動きを次のように述べている。「生産サークル等でいろいろな集まりがある。特別栽培米や宅配など。無線クラブをきっかけに，経営の中に役立てていこうとするグループもある。サークルに多く入っている人は，何かしら経営に役立てようと考えている人。やりたくない人は全然やらない。自由競争の時代になってくるので，これかもいろいろな組織が増えてくるだろう。」

学校レベルの活動は，こうした「経営に役立てよう」とする生産の多様な活動とはちがって，生活面での「地域のまとまり」を確認するものとなっている。地域－学校関係でいえば，PTAという「家」を構成単位とする組織が，すなわち農事実行組合，行政区が，生活組織として機能し得なくなったときに，それに変わって「社会的紐帯に貢献」しうる可能性を持つものとして意識されてきている。そして学校区＝校下という範域は，学校行事・PTA活動を通じ，地域の活力ある層をまとめていく範域として機能している。とりわけ，PTA正会員として集まる父母は，地域においても比較的若く活力ある層でもある。

しかし，過疎化は，この学校そのものの基盤を大きく揺るがすことに他ならない。学校レベルの活動も，しだいにPTAや学校の児童だけで行うことが困難となってきている現実がある。地域の一大イベントである運動会や学芸会は，PTAだけでなく婦人学級，敬老会，保育所と総出で行われなければならない。過疎化の進展は，近い将来，学校の存続（統廃合を含め）さえ危ぶまれる状況を引き起こしつつある。統合問題については世代で対応が異なるというが，メンバーの多くがそのことを危惧している。

以上のような地域の中で，直ちに「夢紀行21」が地域課題に対して，何らかの機能を果たすべく生まれたとみるのはアプリオリに設定された課題となるおそれがある。率直にみるならば，「夢

資料2　地域（実行組合単位）の課題

＜南丘1実行組合＞

・戸数は11戸。これは減ってきていて，後継者のないところはやれるうちはやって，やめてしまう。10年に4軒離農した。これからも4軒離農する予定。農家戸数は減るが，残る者が希望をもってやっていく。

＜南丘2実行組合＞

・6戸しかない。

＜中和4実行組合＞

・現在2戸，行政区で3戸しかいない。葬式はまわりにてつだってもらって何とかやっている。60才移譲で後継者なし世帯が多い。第1次離農期が昭和49年ぐらいで5～6年前に第2次離農期があった。あと5～6年したら第3次がくるかも。

＜中和1実行組合＞

・人が少なくなってきている。これから土地がうまく回るかどうか。地区で9戸中後継者がいるのは3戸のみ。80才代で2人世帯主がいる。あとは60才代。

＜中和5実行組合＞

・離農する人が多くなってきて11戸から8戸になった。部落では合併の話がある。中和4では3戸で農家が3分の2戸。葬式の時は困るので手伝いに行っている。中和地区はまとまりがあるが，人口は減るばかり。後継者がいない。
・基本は農家をやって，きちっとやっていけるようでないと。生計がたてられればもっと発展するだろう。中和校下では盆踊り，敬老会，PTAとあるが年寄りが出る機械が少ないのでは。むしろ後継者のいない人が行きづらい。小さい部落はお互いの助け合いだから。

＜中和6実行組合＞

・17戸中3戸しか後継者がいない。もう米だけではやっていけない。どの程度自由になるのか。農家は食いっぱぐれはないというけれども，昔のような生活はできない。成功するかどうか5年先，6年先をみてやっていくことはできない。金がなければ目先の1年で金を稼いでいくことを考えざるを得ない。
・後継者不足が深刻。60才以上が半分以上。70才をこえている家の1戸ある。10年もしないうちに戸数が半分になるだろう。
・自分達の世代が多く残っているのは，昔からの流れで農家を次ぐのが当たり前という最後の世代だからではないか。高卒時に農業の見通しが良かったわけでもない。農業を始める時点で深く考えていたわけでもない。今はたぶん農業はやらないと思う。先行きが明るくないから。

＜川西2実行組合＞

・過疎が悩みだ。息子に安心して一緒に農業をやろうとは言えない。友人（同級生）がいないから息子が困ったときに相談できる同年代がいない。後継者の数は3分の2でまだいい方である。経営の柱は40～50才で30才代が2人，20才代が2人。他は40才以上。

＜三笠3実行組合＞

・町では実行組合と区の人が少なくなって，行政側では統合しようとしている。後継者がいなくて最低年齢28才。南丘でもテニスコートを今作っている。何度もボーリングして温泉を出そうとしたが失敗している。地元としてはリゾート化が希望。
・高齢化が進んでいる。2～3町の人は60才代の人。この人はトラクターにも乗れない。だからまわりの人がつないでいっているケースが多い。農家戸数は減って行くだろうね。
・各地区は後継者問題。6割は後継者がいない。町としても過疎化をいかにくい止めるかが過大で将来構想の策定がなされなければならない。

紀行21」のメンバーは過疎化・離農＝経営規模拡大という流れの中で生き残ってきた人達，あるいは生き残るための力量・意志・行動力を備えていた人達であり，そうした行動力の一つの表現が，「夢紀行21」の成立であった。また地域や学校の文脈でいうならば，あらかじめ意図された目的，例えば「教員との交流を図るため」「住民の結びつきを深めるため」というのは結果であり，前提ではなかったものと考えられる。そうした点を踏まえる中で，「夢紀行21」の存在やその意義があらためて問われなければなるまい。

まず，「夢紀行21」の設立にあたって，事後承諾や出稼ぎ者の分までカヌーを作製するという動きがあったことに注目しておきたい。そこに農事実行組合という基礎的生活組織が弱体化していく中にあっても，従来から中和地区に存在していた社会的な紐帯を確認することができるからである。「みんなと集まりがもてる」，「他のグループでは集まらない人も集まる」というように学校・PTAという普段の生活や生産の圏域を超えたところで新たなに形成された点も重要であろう。ここに，従来から存在していた社会的な紐帯を，より広い学校区という範域のものに，再び形あるものとして浮かび上がらせようとする一つの「論理」をみることが可能である。

次に，それが父親の独自の集団であるという点が注目される。とくに生産面に関わってきた父親がその担い手であったことは重要である。地域内の農家は，生産面の多様なネットワークが形

資料3　学校・PTAをめぐる課題

・学校を核として楽しくやっていこう。　＜Bさん＞
・PTAの行事がある時以外は飲み会がない。小学生が減ってきている。小学校が統合されるのではないか。　＜Dさん＞
・PTAは堅い。先生と関わるときにはちょっと襟をたださないといけない。PTAをやるにも暇がない。　＜Gさん＞
・現在，学校の行事に親は欠かせない。男親が行かなかったら母親が行くしね。3大行事にはだいたい夫婦で参加している。学校の行事には全面的に協力している。小学校がだんだん小さくなっているから，どういうふうに活動していくかが問題。正会員，準会員の関わり方の問題。子どもが減ると運動会などが大変。　<Hさん>
・大きな課題としては子どもがいなくなるということ。　＜Jさん＞
・小学校の統合ということはないと思うが，もし小学校がなくなったら寂しくなる。だいたいの人を知っているし，PTAは生きるための一つのまとまりのようなものだと思う。学校をなくさないために山村留学なんかやっているところもあるけど，いろいろ難しいと思う。　＜Kさん＞
・学校の存続問題については自分達のような30才代は統合に賛成している。しかし，45才以上の人達はたぶん反対するだろう。　＜Mさん＞
・これから児童数が減ってくるので継続することは難しくなるだろう。2，3年すると児童数自体が23人になってしまう。　＜Oさん＞
・昔の人は学校を残しておきたいと思っているが，自分達は大きな学校がいいのではと思っている。競争力がつかないし，井の中の蛙になってしまうようで。　＜Rさん＞

資料4　夢紀行21の課題と展望

・21世紀に向けて漕ぎ出す。心の底に希望を込めている。夢紀行の活動は家族サービスや家族との会話，仲間以外の人との交流ができる。夢紀行は明るくやっているのでまわりからも理解されている。しかし地域全体に貢献するということではない。
＜Bさん＞
・夢紀行21のように集まる機会は，農業の話や作業面での話をしたり，他のグループで集まらない人も集まるのでいろんな話が聞ける。いいところ，悪いところは特にないと思う。町からの依頼で手作りカヌー教室の手伝いをしているが，本州の人が来るのは良いことだと思う。
＜Cさん＞
・地区の人とは親しい。普段から親しいから夢紀行21がなくてもうまくいっている。夢紀行21は単なる遊びのグループ。課題は会合が少ない。カヌーの活動ができればいい。中和は同じ年代がそろっている。だから何か催しものがある時は，みんなで出るべというふうになる。やると思ったら，駄目になるかもしれないけどやってみる。中和は土地条件にしろ何にしろ和寒の中で中心的だ。農家で残るのはやはり中和だろう。夢紀行でわかってほしいのは，まとまりがよく，みんな仲がいいこと。だから夢紀行21ができた。また夢紀行21ができてまとまりや仲がよくなってきた。
＜Dさん＞
・地域再編の話もあるけど，夢紀行の中ではできない。
＜Hさん＞
・子どもの関係で作った。子どもが中学へあがったから事務局をやめたけど，でもすぐに抜けるのも大変だし1年様子をみた。中学生の親が参加しなくなってきた。どうやってこなせるかが課題である。みんなで集まるのは学校関係を抜かせば夢紀行だけ。夢紀行に集中している。農業はみんな熱心。道内では良い方だ。
＜Iさん＞
・中和地区110戸でも役員なんかやっていてもしゃべる機会はない。大きな地域でサークルとかあればいい意味で顔を知ることができる。顔を知ることが大事。役員で顔を知っていてもしゃべらない人がいたり，上の人とは話すけど，下の人とは話さない。以前はしゃべらなかったが，夢紀行で話すようになった。夢紀行21は楽しかった。飲み会の中でやろうという段取りがあり，しゃべる人とはしゃべった。
＜Kさん＞
・設立した意味が明確でない。やろうとしていることがはっきりしない。ただカヌーにのるだけではなく，子ども達に対して自然環境の保全に向けた活動，自然を意識した活動が必要。カヌーによって発信できるものの追求，例えばカヌーによる自然教育。
＜Mさん＞
・夢紀行21は，ひとつの余暇の一端。いろいろなことを考えて始めたわけではない。子ども達のためだった。学校と地域のつながりも昔からあった。生産サークル等でいろいろな集まりがある。特別栽培米や宅配など。無線クラブをきっかけに，経営の中に役立てていこうとしているグループもある。サークルに多く入っている人は，何かしら経営に役立てようと考えている人。やりたくない人は全然やらない。自由競争の時代になってくるので，これからもいろいろな組織が増えてくるだろう。
＜Oさん＞
・みんなで作るという楽しみと自分のモノだという楽しみがある。子どものことを考えても1つぐらいあってもいいと思う。
＜Pさん＞
・夢紀行21については，正直いってあまり何とも思っていない。子どもが卒業していけばなくなっていくと思う。
＜Qさん＞
・自分達の世代は夢紀行21以外にもたくさんのつながりがある。
＜Rさん＞
・カヌーの集まりという域を出ていない。今はPTAでのまとまり。全町的に広がってくれればいいと思うが。町でもいたましいと思うんだけどね。
＜sさん＞

成しているが，その単位はあくまで個人である。日常の生産活動は，「機械化」の進展により「世帯主夫婦とその親の2～4人でまかなうことができる」。土地基盤整備事業を契機に開始された大型機械の共同利用・共同作業体制も，機械の個人所有化が広がるにつれ大きく後退してきている。父親，つまり農家の経営者層は「何かしら経営に役立て」ようと，生産面での個人的ネットワークを築いてきたのである（例えば，アマチュア無線の「あぜみちクラブ」は，農業改良普及所職員との学習会へと向かっていった）。しかし「生産あって生活なし」といわれる北海道農村にあっても，こうした生産関係のつきあいだけがあるのではない。生活・文化面での人間関係も重要である。否，困難な事情を抱える農村で「生きていく」ためには，「人を知る」ことが不可欠であり，生産面にとどまらない生活面での多様な人的交流が求められているのかもしれない。そのことはS教師が述べた，「夢紀行21」に集まった人々が「生活の変化」を求めたという理由からもうかがい知ることができる。クラブの設立には，農村に生きる経営者としてではなく，子どもの父親としての中和地区に生きる人々の姿がある。以前あった地域を基盤とした文化的協同関係は，青年会の活動を最後に途絶えていた。その意味でも「夢紀行21」は，個別化・孤立化するメンバーが出会う場を，とりわけ農業に関わり生産場面以外での深い交流が比較的少なかった農家の父親の対面交渉の場を用意した，ということが可能である。

「夢紀行21」のメンバーをつないでいるものを考えたとき，何らかの実践を媒介に培われた「協同性」がみられる。例えば，45才以上のメンバーは地域で盆踊りや芸能発表会など青年会の活動を経験している。また若い世代の場合には地域を越えて多様な自主サークル活動を経験している。そして現在両者が関わってきているのが学校，PTA活動，剣道愛好会，子ども会の実践である。こうした実践の中から養われた「協同性」や「協同蓄積」[18]をもとに「夢紀行21」は誕生した。ここでは「手作り」という手法がとくに重要であった。市販のカヌーを購入し，それで遊ぶというのではない。メンバーを集め協同してカヌーを作るという過程そのものが，ある意義を帯びていたわけである。カヌー作りは，メンバーにとっても「工夫の競争」が生まれるほど身近な存在である。農作業の中で培われているような能力を発揮できる存在でもある。まさに「手作り」であったということが，既存のスポーツや文化活動（それはしばしば，それ専用の技術・能力を要請する）とは違う形で，協同の「契機」となり得る十分な存在であった。生活・文化面をめぐる協同の一契機として，カヌーは「手作り」でなければならなかったともいえる。

「夢紀行21」の設立は，その後のカヌーの実践を通じ，メンバー個人，家族，人間関係に変化をもたらしている。町の「カヌー作り教室」実施も「夢紀行21」の存在を抜きには語れない。カヌー作り教室に新たな意義を見いだしているメンバーもいる。ここに，スポーツを媒介とした新たな「協同性」を模索する動きをみることもできよう。

7．おわりに

「夢紀行21」の活動を通じ，学校・教師との関わりが深くなったと感じているメンバー，また，カヌー教室で指導することによって町外の人々との交流がうまれ，そこに意義を見いだしたメンバーがいた。しかし，実際のところそれほど地域・学校のつながりについて「変化はない」と感じるメンバーもいる。もともと「夢紀行21」に集まったメンバーがPTAを基盤としていたこと（地域との関わりについてはPTA＝学校との関わりが前提）や，地域内でも活動的な世代や人々が集まってきているからである。S教師も「この頃のPTAは何をするにも独自性があったり，まとまりがある集団となっていた。またPTA作業後にはよく飲んでいる」と述べている。ただ，独

自性があり，まとまりがあるPTAだったから「夢紀行21」が誕生したとするわけにはいかない。その意味では，S教師がいう「生活に変化」をもとめたという点に再び立ち返らなければならない。

「生活の変化」という点ではGさんの事例に見られたとおり，カヌーを通じた人間関係の広がりがあった。Gさんはカヌー作りにある意義を感じていたものと考えられる。Gさんはカヌー作りの腕で道内外の人々の信頼を集めたのであるが，それはある自信につながっていったように見える。カヌー教室の際には教室に知り合いになった家族と一緒に町内でキャンプを楽しんでいる。町にはカヌーをすることできる川がある。そして中和地区は貯水池もあり，カヌーを楽しむためにはうってつけのフィールドをもっている。カヌーをする以前はその場所は単なる川であったり貯水池に違いなかった。しかし今や，自らが生活する場所はカヌーやキャンプを楽しもうとする人々にとって貴重な場所に他ならなかった。そこに地域の「よさ」を再認識することができる。「町の暇な人がやるもの」であったカヌーは道内外の都市に住む人々との交流を通じて折れ返り(＝都市住民の生活に触れることで自らの生活を対象化する)，自らが自信や誇りをもてるものとなっていったものと推察できる[19]。

手作りカヌーという新たなスポーツの実践は，和寒町を起点に「地域性」にこだわるなかで形成されてきたものである。それが中和地区で受容されたのはPTA＝学校という既存の社会関係の内であった。既存の関係であるがゆえに，一見「夢紀行21」の成立による人間関係は「変わらない」ようにうつるが，「夢紀行21」の設立はこうした地域をめぐる社会関係に規定されつつ，世代を越えた新しいメンバーの相互交流や地域を超えた新たな関係をその外側に形成していった。そしてその過程は，地域の「よさ」「自信」というものを呼び覚ますものでもあったと考えられる[17]。

注および参考文献

1)「新たな」スポーツ，いわゆるニュースポーツといった場合に，この「ニュー」が問題となる(野々宮徹『ユースポーツとは何か』平成4年度勅水野スポーツ振興会研究助成金研究成果報告書，1993)。ここでは，さしあたり北海道の地域性が刻印され，主に北海道（市町村）を中心に行われているスポーツとだけ規定しておきたい。地域性が意識されているという点では，我々が一般にいう近代スポーツとはある距離があるということも可能であろう。近代スポーツが「地域性」や「民族性」を希釈する方向で成立してきたためである。

2) 笹瀬雅史「生涯スポーツ政策と地域生涯スポーツの創造 —— 北海道町村部の事例から ——」日本社会教育学会編『生涯学習体系化と社会教育 —— 日本の社会教育　第36集 ——』，東洋館出版社，1992，pp. 97-105

3) 松村は，農村社会の変容と「メディアとしてのスポーツ」を述べる中で，メディアとしてのスポーツは，グローバル化＝「没場所性」に抗した〈地域〉のレジャーとして再認識される必要性を論じている。「『メディアとしてのスポーツ』は生活者の様々な活動の『場』とともにあり，かつそれを提供するのであって，コミュニティ形成機能を特定化されるものとしてすでにあるものではない。エドワード・レルフに習っていえば，メディアとしてのスポーツは深い経験へと人々を導くものである。そうした経験をスポーツが与えることができるのかといえば，現代のテクノロジー化し，高度化したスポーツでは不可能というしかない。『特色ある場所づくり』は『場所のセンス』を覚醒することから始まるだろう。——（中略）——運動としての〈地域〉に新たに創られた『スポーツ』を『埋めこむ』必要があるとだけ，今は述べておこう。」松村和則『地域づくり

とスポーツの社会学』道和書院，1993，pp. 157-158．また，北海道での実践については前田和司「生活と自然を媒介するスキー」僻地教育研究，第四号，1996，pp. 75-84 を参照．

4）松村和則，同上書，pp. 175-177

5）和寒町および天塩川流域の手作りカヌーの実践については，前田和司「天塩川流域におけるカヌー・クラブ・ネットワーク」，『国際シンポジウム「教育系大学における生涯学習と大学開放」』，生涯学習叢書Ⅳ，北海道教育大学旭川校，1995，pp. 145-150，および前田和司編著「天塩川流域における手作りカヌー報告書」北海道教育大学旭川校体育社会学研究室，1996 を参照。

6）玉井康之『北海道の学校と地域社会～農村小規模校の学校開放と地域教育構造』，東洋館出版社，1996，p. 40

7）玉井康之，同上書，p. 41

8）篭山　京『戦後日本における貧困層の創出過程』東京大学出版会，1976

9）篭山　京，同上書，p. 80

10）篭山　京，同上書，p. 240

11）『和寒町史』，1975，pp. 209-211

12）玉井康之，前掲書，p. 40

13）田端　保『北海道の農村社会』日本経済評論社，1986，pp. 37-38

14）『和寒町史』，1975 年，p. 465

15）あぜみちクラブ（会員 26 名，農家，農業関係機関，役場，町外在住者で構成）は農業改良普及所の職員との交流会をきっかけに生まれた「アマチュア無線クラブ」であった。会員の中に無線の免許を持つ者がいて「みんなで無線の免許でもとるか」というごく単純な話から発足している。当初，会員夫婦から子どもまでが無線免許取得に夢中になり，皆，無線の話題で盛り上がっていた。しかし，ほとんどのメンバーが免許にパスした後になると，会合は「飲みながら結局仕事の話になる」。そのため，クラブは普及所職員を交えた学習会へと内容を変化させていったという。現在では酪農関係者と水稲・畑作関係者に分かれ，農法・転作の情報交換，品種改良したかぼちゃでのブランド作りなどを行っている。「今となっては無線はただのきっかけにすぎない」とされる。

16）工作クラブ，子ども会，そして「夢紀行 21」設立を契機に，中和小学校では隣の小学校との合同研修の開催（カヌー）が行われるようになる。そして校内でもカヌーを想定した，着衣水泳授業ももたれるようになった。こうした背景には当時校長をつとめていたＴ校長のカヌーへの理解があった。そして他の教師もこれらを通じカヌーに興味を示すようになった。

17）ピエール・ブルデュー「スポーツ社会学の計画表」『構造と実践』，新評論，1988，p. 276

18）宮崎隆志「地域づくりと協同労働」『生活協同組合研究』，1997．2，pp. 4-10

19）産直を行っているＰさんは，実際に都市住民を和寒に招き，芋掘りの体験など都市－農村交流を2年間行った。そこで得た都市住民の和寒に対する評価は「開発しないで何もないのがいい」というものであった。またＰさんの妻も「都市の子どもはとんぼの捕り方も知らない」ことに気づき，自然の中で遊べない子どもの姿に驚いたという。しかしだからこそ「開発しないで何もないのがいい」という理由も理解できその自然が財産であり誇りであると思うようになったと述べている。

17）「夢紀行 21」自体に課題がないわけではない。父親を中心に結成されたことから，仕事の都合により事業に参加できないメンバーや，「子どもが中学に行くとなかなかカヌーに乗らなくなる」という理由で今後の活動を危惧するメンバーもいる。中和剣道少年団との関係や対照性もある。「夢紀21」自体の歴史がまだ浅いためめ，今後の活動の展開についても課題としたい。